

第3章

事業に対する評価



2020年1月11日に全参加青年が東京に集合して始まった令和元年度「世界青年の船」事業は、1月16日のにっぽん丸の横浜港出航、35日をかけての太平洋往復、メキシコ合衆国での寄港地活動等を経て、2月20日の修了式、解散交歓会、24日の外国参加青年の地方プログラム終了及び帰国をもって終了しました。今回の事業を無事遂行することができたのも事業に関連した全ての方々の献身的な協力によるものであり、心より感謝しております。

参加青年にとって、世界中から集まった、バックグラウンドの違う者との1か月を超える洋上での共同生活は、全く初めての経験でした。しかし、出航後早々に行われた参加11か国それぞれによるナショナル・プレゼンテーションが終わるころには参加青年の間に一体感が醸成され、これは事業終了まで途切れることはありませんでした。

ナショナル・プレゼンテーションで示された各国の団結と個性は、その後、夜の自主活動時間に行われたデリゲーション・ナイトでも発揮されました。同様にクラブ活動でも参加青年は他国の文化や伝統を学び、エキシビションで見事な発表をしました。

一方、七つのテーマが設置されたコース・ディスカッションは、各ファシリテーターの尽力もあり、大変知的刺激に満ちたものとなりました。回を追って参加青年間の議論も充実したものとなりました。また、参加青年が自らテーマを決めて発表するPLセミナーではそれぞれの青年の関心や専門分野に沿った発表が行われました。同様の自主的な発表は自主活動時間にも活発に行われ、夜ごとに船内の各所で熱心な議論が行われていたのがとても印象

的でした。

メキシコのエンセナーダ港に寄港中の1月30日から2月1日にかけて実施された寄港地活動は、同国の同窓会組織の献身的な準備もあり、大変充実したものとなりました。活動中にティファナ市に建設されたメキシコと米国との国境の壁を訪れたときは、一部の参加国からの青年は涙を流しましたが、これは他国の青年にも国際問題を考える貴重な機会になりました。

今回の航海では、気象条件の影響による東京港帰港の1日順延など、予想外の予定変更を余儀なくされたこともありましたが、参加青年は前向きな気持ちでそれを受け入れてくれました。

また、私が大変感動したのは、参加青年の他者に対する親切心です。参加青年は皆、初めて会ったにもかかわらず、バックグラウンドの違いを越えて、昔からの友人のように助け合っていました。私はこのことをとても高く評価したいと思います。

事業終了後、参加青年はそれぞれの国やホームタウンに帰り、再び生活を始めます。この事業での体験、そして航海の最後に感じたハーモニーは人生の宝物になるでしょう。事業参加中に得たことを周囲への貢献のために使っていただきたいと思います。そして、私たちの友情は永遠に続くことを確信しています。

私にとっても、この事業に関与し世界中の素晴らしい若者とともに過ごせたことは大変な喜びでした。今後とも、本事業の更なる発展のために最大限の努力をしたいと考えています。

最後に、本事業に関連するすべての方々のご健勝を祈念して、この文章の締めくくりとさせていただきます。

各国ナショナル・リーダー評価

バーレーン王国

オリンピック・パラリンピック競技大会の東京開催を控えた記念すべき年に、光栄にも私たちバーレーン王国は「世界青年の船」事業に招かれた。

可能性と大志を持った青年が、持続可能で公正な、よりよい未来を切り拓く未来のリーダーとなるべく集まり、外の世界から切り離された空間で自己の研鑽に励んだ。

多国籍が交わるプラットフォームで、地域社会の発展だけではなく、互いをサポートしながら共通の地球的規模の課題の解決を目指し、国際社会の懸け橋となることを実践するのは、この事業のすばらしさを体現している。

スポーツの可能性

2020年夏季オリンピック・パラリンピック競技大会の東京開催に先駆けて、スポーツが肉体を使って自身の強みを表現するのみではなく、国籍を超えて人と人をつなぐ可能性に期待をしながら、参加青年にはっぽん丸に乗船し、船内のオリンピック・パラリンピックセミナーに参加した。各参加国が誇る過去のスポーツの実績について学ぶとともに、スポーツがいかにして各国の社会的地位や経済状況の向上に貢献できるか、参加青年同士が異なる意見を交換した。

学び合う経験

この事業の真の価値は、異なるバックグラウンドと文化的背景を持つ私たちが、外の世界から切り離された空間で、お互いから学び、知識を共有し合えることにある。参加青年にとって、ここで養った国際的なプラットフォームは、いわば片道切符のようなもので、辿りついてしまえば、この広い世界でどれだけ物理的に離れようと、文化や慣習、解決すべき課題など多くの共有事項から学び続けることができる。

多種多様なバックグラウンドを持つファシリテーター、管理部門、ナショナル・リーダーに囲まれ、そのうちの何人かはこの事業の既参加青年であることは、青年たちのリーダーシップやその他の能力を育み、事後活動へのアイデアや具体的な行動を支えるという点において大きな付加価値を与えてくれた。

多様で活気に満ちたナショナル・リーダーチームも、今回の事業の鍵となる重要な役割を果たした。かつて参加青年だった経験を有するナショナル・リーダーの視座に加え、今回初めて事業に参加するナショナル・リーダーからのすばらしい提案も大きな助けとなった。ナショナル・

ナショナル・リーダー

ル・リーダーが力を合わせることによって、日々直面する課題を乗り越え、参加青年に対して可能な限りのサポートをすることができた。

SWY スピリットを持ち続ける

事業を通して、この事業の既参加青年しか共感できない、いわゆる SWY スピリットを形成した。それはすなわち、相互理解の精神や前向きな姿勢、異なる文化の懸け橋となり、可能性を広げ、いつでも行動を起こす気質のことを指す。

- 私たちは一つ — 人種や民族、肌や目の色、バックグラウンドが何であろうと、この世界の若者として、よりよい社会を目指す同士として、変化に対する前向きな姿勢と柔軟な心を持つ人間として、私たちは団結した一つの集団である
- お互いから学び、成長し合える関係 — 文化やリーダーシップ、生きるための力、自信や才能、あるいは時間に対する感覚や地球的規模の課題など、たくさんのことを学び合える
- 文化の違いや物理的な距離を越えて — より明るい未来に向けて、お互いを鼓舞し合いながら、私たちは地域社会あるいは国際社会でこの事業の先にある事後活動に取り組むことができる

感謝を込めて

バーレーンの参加青年は、陸上研修、船上研修、寄港地プログラム、そして地方プログラムのあらゆる場面において、積極的に参加し、今回の事業の成功に貢献した。コース・ディスカッションでは議論をリードし、セミナーではステージで発表し、バーレーンの豊かな文化や価値観を積極的に伝えることなどを通して、リーダーシップを発揮した。周囲の人々からもらうフィードバックから、彼らの努力と活躍を誇らしく思い、またこの事業の可能性を信じて選考時からサポートしてくれたバーレーンの事後活動組織や青年スポーツ省に感謝を伝えたい。また、事業への参加を常に支え、応援してくれた在バーレーン日本大使館並びに在日本バーレーン大使館にも、この場を借りてお礼を申し上げる。これから先、自分が暮らす地域に限定せず、世界中に存在する本事業の同窓会組織や既参加青年と共に、事後活動に励む参加青年たちの活躍に心から期待している。Keep SWYing!

ブラジル連邦共和国

今年度の「世界青年の船」事業は、人生を変えるような体験であり、参加できたことを心から光栄に思う。これは私個人の想いではなく、参加したブラジル青年全員の想いを代表して語っている。「世界青年の船」事業がいかにすばらしいか、またそこにどれだけの準備や労力が伴ったか、そしてその結果、どれだけの数の人の人生に影響を与えているかを、今回2度目となる事業への参加を通して改めて実感している。より豊かな国際社会を目指す内閣府のビジョンやその実現のための尽力に対して、改めて感謝の気持ちを伝えたい。

事業期間中、そしてその前後に及ぶ多大な準備、労力、情熱を注いでくれた関係者のみなさんに、この場を借りてお礼を申し上げたい。ここでいう関係者とは：

- この事業に関わった全ての人の日々の生活に想像を巡らせ、あらゆる側面から詳細に計画を立ててくれた内閣府職員及びその他の日本政府関係者
- スタッフ、乗組員を含む全員の安全に配慮し、円滑な運航や移動を手配してくれた運航や旅行の担当者
- 日々、参加青年の健康と健全な活動を支えることにより、事業を成功に導いたファシリテーター、PY サポーター、通訳を含む管理部門
- 訪問中、私たちが家族の一員として迎え入れ、日本の文化や日々の慣習に触れさせてくれた各地方プログラムのボランティアやホストファミリー
- 複雑であり、美しくもあるメキシコの文化を体験させることで、日本のみならず、すべての参加国との懸け橋を築いたメキシコの事後活動組織と、その主導のもと、世界中からサポートに駆けつけた世界中の既参加青年

世界中から集まったたくさんの若者が、その目に輝きを宿し、変化に対する強い志と強靭な心で、それぞれの帰路へ着くことができた。世界中から集まった優秀な若者に、より明るく、公正で、健全で幸せな未来を創るための行

ナショナル・リーダー

動を起こす後押しをすることが、この事業が持つ力である。

9年前にブラジルの代表青年として参加し、今回ナショナル・リーダーとして事業に戻ったことで、事業が遂げた発展に気づくことができた。過去の事業からのフィードバックによって成し得た変化であると察するが、最も大きな変化だと感じたことは、参加青年の自主活動の時間が増えたことである。

自主活動は参加青年が成長するための時間と空間、すなわち安全な環境で、多様なバックグラウンドと価値観を持つ青年同士が世界中の重要かつ喫緊の課題について議論するプラットフォームを与えてくれた。共同作業と個々の才能が相まって、より大きな目標を達成し、自主活動を実施する青年たちの情熱や、その企画に参加する青年たちの感動を目の当たりにした。自分の努力が多くの人に支えられ、また感謝されるという、人生の中でも非常に限られた瞬間を得ることができたことだろう。

今回、ナショナル・リーダーを務めることで、個人の見解ではなく、ブラジルの参加青年と自国を代表して話し、様々な議論やたくさんの側面を考慮に入れながら船上のすべての人の利益に資する判断を求められたことは、とても貴重な経験をさせてもらえたと感じる。

海の真ん中で、自己発見をしていたのは青年たちだけではなく、自分自身もそうであった。教育者として、自分がどのように青年たちをサポートすれば、彼らが自分たちの人生の主人公としてより活躍できるかを何度も考えさせられた。たくさんの会話を通して自己分析をすることで、この事業を通して、この事業のために、あるいはこの事業のおかげで達成できたたくさんのことに気付くことができた。

この事業を誇りに思い、また関わられたことに感謝している。そして、たくさんの青年たちが私と同じように感じる後押しをできたのであれば光栄に思う。

エジプト・アラブ共和国

令和元年度「世界青年の船」事業にエジプトを招き、通算14回目となる事業への参加を叶えてくれた内閣府に、心から感謝している。

また、エジプトの青年スポーツ省による、今年度のエジプト参加青年に対するサポートやスポンサーシップには、事業の準備期間中大変助けられた。在エジプト日本

ナショナル・リーダー

国大使館やエジプトの同窓会組織による事前オリエンテーションは、事業への参加に先駆けて、プログラムの内容を理解する上で非常に有用であった。これらの支援に対して、この場を借りて深くお礼を申し上げたい。

事業開始前の活動

ナショナル・リーダーとして、出航前の期間における私の目標は、エジプトの参加青年がりのままの自分の姿でいられる空間を創り、お互いに親睦を深め、自分たちが持つ可能性を十分に理解できる環境を実現することだった。

また、日本語教師として、私は日本語や日本の文化、生活様式などを説明することで、来日後のカルチャーショックを和らげるよう努めた。

陸上での活動

来日後、国立オリンピック記念青少年総合センターにて宿泊し、研修に参加した。この期間に、エジプト参加青年は他の国から参加している青年たちと打ち解ける機会に恵まれるとともに、これから始まる船上での活動への期待に胸を膨らませた。

船上の生活

待ちに待った船上生活。事業が終わったいまなお、私たちが「我が家」と呼ぶ客船にっぽん丸に乗船した。船上では、ナショナル・プレゼンテーションやコース・ディスカッション、ALL-PYセミナーやPeer-Learningセミナー、クラブ活動、デリゲーションやレター・グループなどの単位で行うミーティング、その他の自主活動など、様々な研修が行われた。

時に過密で、負担に感じることもあったが、それらは間違いなく価値のある学びであり、互いの文化、背景、個々の関心事について理解を深める機会となった。

健康管理のために早寝を奨励する“No Party”、それに対抗する“Yes Party”や、船ならではの時差調整で、夜中に時計を1時間進めたり戻したりする日の“1 hour forward”や“1 hour back”など、深く記憶に残るフレーズも多くあった。朝の点呼や、乗下船時の全体集合において、1分の遅刻も許されないという体験は、彼らの時間厳守に対する価値観に大きく影響を与えた。

寄港地活動

メキシコで過ごした三日間、たくさんのことを考えさせられたが、メキシコと米国の間の国境の壁への訪問はとりわけ印象深かった。メキシコの参加青年たちの感情を揺さぶる国境への訪問は、のちにメキシコの参加青年が国境に対する心境を語り、すべての参加青年を交えて世界中の国境や国家についての議論へと発展した。

寄港地で実施された課題別視察は、現地の青年や、私たちの旅を応援するために遠方からわざわざ駆けつけてくれた既参加青年たちとの交流の機会に溢れていた。

帰国後の陸上での活動

日本に帰国すると、ナショナル・リーダーとアシスタント・ナショナル・リーダーは内閣総理大臣を表敬訪問する機会に恵まれた。また、東京都内のオリンピック・パラリンピック競技大会の開催予定地や関連施設などを訪問したり、レター・グループごとに都内視察を楽しんだりした。35日間の過密スケジュールを終えたばかりの私たちにとって、これらの活動は良いリフレッシュになり、また気持ちの切替えに最適であった。しかし同時に、日本への帰国は私たちが離れ離れになる時が近づいていることを知らせ、感情的になりやすい期間でもあった。

広島での地方プログラム

エジプトの参加青年は、英国の参加青年と共に広島県の地方プログラムに参加した。広島県青年国際交流機構や地元青年たちによる企画・運営により、私たちは副知事への表敬訪問やお好み焼きづくり体験、ホストファミリーのすばらしいホスピタリティに触れる時間など、すばらしい機会に恵まれた。

広島平和記念公園と資料館では、被爆者の親族の方による講演を聞くとともに、私たちが自国に戻った際に、ぜひこの話を家族や友人と共有してほしいと言われた。感情が溢れるとともに、私たちは改めて戦争の悲惨さを再認識した。

エジプトの参加青年は、あらゆる活動に対して活発に取り組むことによって、今回の事業の成功に大きく貢献し、またその過程で、個々の参加青年の人間的な成長を垣間見ることができた。管理部員やナショナル・リーダー及び他国の青年たちから、エジプトの参加青年について肯定的なコメントをもらい、私は彼らの頑張りに対して感謝の気持ちを抱いた。彼らが今後取り組む事後活動についても期待したい。

この事業を通して私たちは、「国際社会を視野に入れ、自分が暮らす地域で活動する」という精神を身に付けた。帰国した後、各自が限界に挑戦し、たとえ小さな変化であってもそれを実現するイニシアチブを取るという強い志を持って、私たちはより良い世界を創るために社会貢献に励むことだろう。

「世界青年の船」事業に初めて参加するフランス代表チームにとって、自国の事後活動組織の不在、不十分な準備期間などの要因により、様々な苦勞が伴う経験となった。しかしながら、創造力や順応性、イニシアチブを発揮することへの意欲をもって、ただ困難を乗り越えることに留まらず、このすばらしい事業における経験値を最大化することができた。フランスの参加青年が個人として、あるいはリーダーとして、この事業を通してどのような成長を遂げたかを、下記に挙げる六つの視点から考察したい。

1) 異文化対応力の向上

フランス代表に選ばれた参加青年は、事業開始前に集まる機会がなかったため、その他の参加国のチームに比べて結束は強くなかったかもしれないが、そのおかげで他国の青年たちと打ち解けるのが早く、異文化に対して柔軟に向き合うことができた。交流を通じて、多様性を認め合うことができると共に、他国の青年たちも私たちと共通の希望や志、不安を持っていることを発見できた。こうした環境は、次世代を担うリーダーにとって、自分が所属する社会や自国のみの利益にとらわれることなく、グローバルな精神と協調性をもって物事を考える力を与えてくれた。

事業全体を通して五大大陸すべての文化に触れることができたことに加え、静岡県での地方プログラムでは、茶道や温泉などの体験を通して日本文化を深く学ぶ機会に恵まれた。こうした体験を踏まえ、これから設立する同窓会組織の活動においては、日本とフランスの友好を深める活動に取り組んでいきたい。

2) 自己の再発見

客船につぼん丸は、時間や空間から切り離されたカプセルのような場所だった。インターネットから離れ、日常生活から距離を置き、気心が知れた仲間内で発生するpeer pressure（集団内で、仲間と同じでなければならぬと感じる無言のプレッシャー）から解放されて、自分たちが真に大切にしたいものとは何かを振り返ることができた。ある参加青年にとって、この体験は今の自分が歩んできた道を再確認する機会でもあり、また別の参加青年にとっては自身のキャリアや生活を大きく変えるきっかけにもなった。

3) 自国とその文化を伝える親善大使

フランス代表チームとして活動することは、私たちフランス人が共通して有する強みとは何かを理解する良い

機会となった。私たちの独創性やユーモアのセンス、柔軟性、好奇心は、自国の教育によって育まれたことを改めて認識した。

事業を通して自国を紹介することによって、フランスの食文化やファッションをこれまで以上に誇りに思うとともに、ありがたく感じた。また、他国の社会課題を知ることで、フランスがこれまでに経験してきた問題について再考することができた。

4) 自己肯定感の向上

手作りフランスコスメ教室や、大多数の参加青年が参加したファッションショーなど、複数のイベントを企画・実施することによって、これまでにやったことがない挑戦をし、殻を破って新たな一歩を踏み出すことができた。この経験は、私たちの自己肯定感を高め、将来において、これまで以上のリスクとイニシアチブを取ることに自信を持つことができた。

5) 地球的規模の課題への気付き

時にはコース・ディスカッションでの議論が深さに欠けることもあったが、その議論の続きを他の参加青年たちと行い、地球的規模の課題について見識を広げることにつながった。こうした議論は、教育、移民、ジェンダー間の平等、環境などのテーマをより掘り下げて議論する契機となり、私たちが社会課題の解決のために個人あるいは集団でアクションを起こすきっかけとなった。

6) 国際的ネットワークの構築

たった2か月という短い期間において、私たちは日本をはじめ世界中の人と強力な絆を結ぶことができた。単に新たな友情を育んだという事実を超えて、将来の担い手となる私たちにとってこの国際的なネットワークはすばらしい価値を持つものである。

だからこそ、帰国後は、フランスの参加青年が一丸となって本事業の同窓会ネットワークの発展に貢献することに優先的に取り組みたい。日本参加青年が主体となり、アドレス帳を作成してくれたおかげで、今年度の参加青年が今後お互いにコミュニケーションをとる基盤ができた。同じように、すべての既参加青年が連絡を取り合えるようなアドレス帳を、「世界青年の船」事後活動組織(SWYAA)あるいは内閣府のイニシアチブで作成してもらえることを期待したい。

まとめ

今回、日本政府がフランスを参加国として招へいして

くれたことは、私たちフランス参加青年にとって非常に光栄なことであり、この場を借りて深く感謝申し上げます。参加青年として、私たちが内閣府の期待に応えられ

たことを願いつつ、これから発足する同窓会組織のサポートのもと、これからも定期的にフランスが本事業に参加することを期待している。

英国（グレートブリテン及び北アイルランド連合王国）

ナショナル・リーダー

英国のナショナル・リーダーとして、このようなユニークな旅に参加できたことを大変光栄に思うとともに、内閣府に心から感謝を申し上げます。英国の参加青年にとって、この事業がどれほど大きな影響を与えたかは筆舌に尽くしがたいが、その成果がこれから先、時間をかけてより大きな実りをもたらすことを確信している。

この事業を通して、10か国の参加国から、未来のリーダーたちがそれぞれ異なる言語、文化、歴史を持ちより、友好を育む機会に恵まれた。日々の交流を通じて、同じ空間にいる相手から学ぶことを通して、従来備わっていた価値観や固定観念を変えたり、船上生活を通して交流を深めたりすることができた。それを可能にしたのは、ほんの一部にすぎないかもしれないが、他国の文化に触れるとともに、体験型の交流があったからである。船の上という空間は、私たちが自身の強みや才能を発揮し、ありのままの自分でいられることに加え、今日、世界が直面する様々な課題について共有し合える、安全な居場所を提供してくれた。そしてこうした地球的規模の課題は多くの場合、一人では解決できず、団結が求められるものであり、船上はまさにそうした協働をスタートする第一歩となった。

また、船上生活は喜びから悲しみまで、私たちは幅広い感情を経験することができた。様々なことを一緒に経験することにより、私たちの間に確かに存在していた明らかでない違いは、次第に不鮮明なものとなった。船の上で育んだ関係は一つの始まりにしか過ぎず、ここで培った交流、相互理解、協働の精神は、自国や国際社会でも継続して体現することだろう。寄港地活動では、メキシコの歓喜が私たちの感覚を刺激し、メキシコという国の文化やその豊かさに触れることができた。また、地方プログラムのホームステイは、地元の伝統や知恵を学ぶことで、地域社会と国際社会が共に社会変革に取り組み、目の前にある小さな課題を解決し、より大きな目標の達成を目指すことの重要性を改めて教えてくれた。この事業は世界の縮図であり、そこで私たちは世界の協調と平和を実現するための、小さな、けれど重要な一歩を踏み出すことができたように思う。

一生涯の友情に加えて、私たちはこの事業を通して自分たち自身のことをより深く理解することができ、その

経験は私たちが地域や国際社会に対してどのような貢献ができるかをより鮮明にしてくれた。グローバル・リーダーとなるには、深く内省し、私たち一人一人に備わっている可能性と向き合う必要がある。開かれた心や偏見のない視点を持つために、私たちは他の文化に対する視野を広く持ち、それらに対する好奇心を持つことが重要であることを学んだ。こうした姿勢が、私たちがいかにして「異なるか」ではなく、いかにして「つながることができるか」を教えてくれる。この旅を通して、私たちの間にある違いはすばらしい価値のある財産であり、喜びとともに享受すべきものだということを改めて学んだ。この価値を活用すればするほど、私たちが社会に与えられる影響はより大きく、可能性は無限大に広がっていく。

5年前にこの事業に参加し、今回、創造力と意欲に満ちた、多様でにぎやかな英国代表青年を率いる立場で事業に戻ってこられたことの喜びは言葉にできない。この事業を通じて出会った全ての人からたくさん学ぶことができた。当初は英国の代表団と、国籍が混合した自分の所属するレター・グループの両方に対して、どのようにリードすることができるか戸惑いを感じていた。しかし、飛び込んでみれば体験を通してそれぞれのグループのニーズをどのように満たすことができるか学ぶことができた。何が最善のアプローチかは、やってみないとわからない、ということをもっと知る機会となった。船上にいる私たち全員のために、創造力、好奇心、イニシアティブを発揮してくれた参加青年と、個々の強みを生かしつつ、チームワークでダイナミックな力を発揮したナショナル・リーダーにとっても感謝している。

最後に、内閣府、日本青年国際交流機構、PYサポーター、心理カウンセラー、看護師、ファシリテーター、旅行業務担当、郵便局員を含むすべての管理部門と、船長、乗組員のみなさんに感謝を伝えたい。円滑な運営と、それを可能にした膨大な準備のおかげで、私たちは安心して仲間たちとつながること、互いから学び、楽しむことに集中することができた。今後の事業の成功と、事業が大切に育んできた精神が、事後活動組織の支えによって継続していくことを心から期待している。

まず令和元年度「世界青年の船」事業に日本ナショナル・リーダーとして参加させていただく機会を得たことに心より御礼申し上げたい。そして、新型コロナウイルスの感染が世界中で広がる中、本事業が無事終了したことに非常に安堵感を覚えている。これもひとえに内閣府や青少年国際交流推進センターをはじめ、関係各位の皆様方のお力添えがあったからこそと存じており、深く感謝を申し上げる。

本事業を通じて、1か月以上日本と世界10か国の若者たち約240人と寝食をともにし、大変刺激的な日々を過ごすことができた。ダイバーシティあふれる世界青年の船のすばらしさを体験させていただいた。

個人的には参加青年が日々、コース・ディスカッションやクラブアクティビティなど「にっぽん丸」船上で様々な活動を行い、若者同士のふれあいの場を広げていく様子を目にし、嬉しい限りであった。

やはり若い時の友人は「一生の宝」だ。日本参加青年と外国参加青年が世界青年の船でともにつくった思い出は、かけがえのない経験で、今後もいつまでも深い友情の絆を強めてくれることであろう。これは私が1992年度「東南アジア青年の船」事業に参加し、四半世紀以上経った今でも、フェイスブックなどSNSで繋がっていることから明らかだ。参加青年には今後も、世界青年の船で培った友情を深めていってほしいと願っている。本事業

業は終わったのではなく、今、始まったばかりなのだ。

若者の国際交流を後押しするためにナショナル・リーダーとして私に何ができるか。私はまず、日本参加青年全員が初めてそろった2019年9月の事前研修で、ナショナル・リーダーである私が自らの全てをさらけだし、誰もが話しやすい環境をつくってあげないといけないと思った。このため、非常に思い悩んだ末に、小さい頃、母子家庭で育った苦勞など自らの恥ずかしい過去や弱さをみんなの前にすべてさらけだした。

その事前研修三日目以降、参加青年もみんなの前でどんどん自分のことや意見を言うようになり、やはり周りが対話しやすい環境をつくってあげれば、今の青年はどこまでも自己表現をできるものと確信した。

にっぽん丸の船上でも、数多くの日本参加青年が日に日に、ドルフィンホールの壇上で参加者全員を前にし、何度も堂々とプレゼンしたり、司会進行役を務めたりしていて、頼もしいばかりであった。こうした国際舞台で発言した体験は、大きな自信となることだろう。将来が楽しみである。

次世代を担う若者に、より良い国際交流の場を提供し、国際的な相互親善や相互理解を促進していくことが私たち上の世代の責務だと思っている。「世界青年の船」事業を終えた今、この経験を生かし、私は今後も若者の縁の下の力持ちになるべく全力を尽くしたいと思う。

SWY、それは世界を発見し、自分自身を深掘りする場所

約6年前に「世界青年の船」事業と同様に内閣府の青年交流事業である「東南アジア青年の船」事業の参加青年としてにっぽん丸に乗船し、今回、船上でのプログラムにサブ・ナショナル・リーダーとして関わることは、参加青年の視点とは違った視点からプログラムを見ることができ、自分自身にとっても非常に多くの挑戦と発見が得られた。その中でも、ここでは2点を挙げたい。

まず初めに、人の成長に関わることで自分自身も大きく成長できるということを知ることができた。サブ・ナショナル・リーダーとしての私の最大の目標は、参加青年が事業を通しての気づきを最大限に得られるよう手助けをすること、自発的な学びの環境を整えることであった。英語でのコミュニケーションに課題を感じたり、他の参加青年と比べ劣等感を持ちがちな青年、密度の濃いプログラムに対して不安を持つ青年のケアを最優先にし

ようと決め、プログラム中に彼らの様子を把握し、必要に応じてファシリテーターや他のナショナル・リーダーに状況を伝えたり、直接対話の時間を取った。これらの過程の中で、結果として、コミュニケーションスキルなどにおいて私自身が多くを得ることができた。

次に、アイデンティティを築くことの大切さに気付くことができた。「東南アジア青年の船」事業では、アジア文化圏として参加青年同士の価値観に少なからず共通するものを感じたが、「世界青年の船」事業はより多様性に富み、国籍では定義できない個人単位での個性が光るように感じた。自主活動や日々の生活の中で、青年たちが考えを発信し、関心のあるテーマのセッションを主催するモチベーションは、個々のアイデンティティから来るものなのだろうと思う。少人数で各自の思いを自発的に語り合う様子を多々目にしたが、そういった場合は、他者と触れることで自身を深く掘り下げる機会になったはずである。そのようなことが起きる

のも、「世界青年の船」事業では、違いを理解し、尊重するという共通理解があり、安心して自分を表現することができる環境がつけられているからであり、本当に貴重な学びの場だと再認識した。日本では、個としてのアイデンティティが何かを意識する機会が少ないが、自身のアイデンティティを意識することは、自分の軸や意見を持つことに繋がると考えている。「世界青年の船」事業は、日本青年にとって自分が何者であるかを考え、形にす

るきっかけを与えてくれる絶好の機会だと言えると感じた。

最後に、各国の素晴らしいナショナル・リーダーたちのチームの一員として、様々な課題に共に取り組む機会が得られたことに心から感謝したい。彼らのイニシアチブの取り方、問題対処の方法からも若きリーダーとしての在り方を学ばせていただいた。今後、この経験を活かして社会に還元できるように精進したい。

ケニア共和国

今年度の事業のケニアのナショナル・リーダーとして、ケニアの参加青年全員を代表し、私たちを招待し、本事業で最も重要な成果である、永く続く友情の構築を可能にしてくれた日本政府に、深く感謝申し上げる。

事業を通じて、私たちは世界中から集まった10か国の青年たちとともに、互いの文化や歴史を分かち合い、学び合い、これから先、永く続く友情を深めることができた。また、世界各国がつながり合う今日の国際社会を生きる若者として、それぞれが直面する課題や共通課題について議論し、共有し、時には解決策を生み出すことから、学びを深めることができた。

見知らぬ若者同士が生活を共にし、やがて家族同然と言えるほど親しい関係を築くことができる船上での生活は、人の精神の美しさを垣間見ることができる瞬間だった。寝食のみならず、船酔いすることも、船酔いから回復することすらも共有し、私たちはたくさんの共通項を発見した。たとえ悲しみに打ちひしがれる瞬間があったとしても、この事業に参加した私たちは、それぞれの人生により大きな意味があることを感じ、悲しみを癒すことができるだろう。参加青年がそれぞれ地球的規模の課題について多様な視点を持ち寄ることで、その解決策を議論することは世界が直面する共通の懸念事項を改めて浮き彫りにした。

太平洋を横断し、メキシコのバハ・カリフォルニア州を訪問したことは、実体験を通してメキシコを捉えなおし、マスメディアなどによって植え付けられたメキシコに対する偏見を払拭する機会となった。将来を担う若いリーダーたちと交流し、現地の歴史に触れることは、今

ナショナル・リーダー

日、国際社会が直面する課題に対する理解を掘り下げることに繋がった。先住民文化の保護や、地球市民として多文化共生を実現する姿勢は、参加青年一人一人の、物事的前提を問いなおす視点や批判的思考に磨きをかけた。

和歌山県での地方プログラムでは、ホストファミリーと上質な時間を過ごし、歴史や文化を知ることで、日本が有するありのままの美しさに触れることができた。本事業特有とも言える地方プログラムのおかげで、めったに訪問することができない日本を直接訪れ、実体験を通して学ぶという経験をすることができた。地方プログラムにおいて、各県の政府によって提供された温かい歓迎やおもてなしの精神は、この事業が持つ多文化共生という本質を体現していた。

事業期間中、力を合わせて解決しなければならない課題に直面したこともあったが、それらの瞬間にそれぞれの参加国が互いから学び、知識を得たことで、この先、新たな課題が発生した際に行動できる素地を養ってくれたということを忘れてはならない。

この事業を共にしたすべてのSWYファミリーに対して、一人一人の創造力、思いやり、受容性に感謝したい。安全性や学習効果を最優先に事業を実施していただいた管理官や管理部長、ファシリテーター、にっぽん丸の船長や乗組員の方々は、事業にとってかけがえのない財産であり、「世界青年の船」事業の成功のために必要不可欠な存在だった。

SWYの成功を祝福して“Hongera”（スワヒリ語で「おめでとう」）

“Let the world see how we can truly be, living in harmony...” (調和と共に歩むことができる私たちの本来の姿を、この世界に示そう)

これは、今回の事業で歌われた歌詞の一部であり、メキシコの参加青年は、本事業期間中に10か国の仲間たちとともにこのフレーズを実践する機会に恵まれた。

私たちの旅は、「日の出ずる国」から始まり、「月のへそ（アステカ族の言葉でメキシコの意）」を目指し、その道中で参加国の間の類似点と相違点からたくさんのことを学んだ。また、事業を通して、メキシコ参加青年はそれぞれに異なるメキシコの側面を発信し、メキシコの多面性を披露することができた。

こうした実践を可能にしたすばらしい機会の一つに、ナショナル・プレゼンテーションが挙げられる。ナショナル・プレゼンテーションで紹介したメキシコの歴史の中には、1968年のオリンピック大会における学生運動など、メキシコが直面する厳しい現実も一部含まれたが、それらをユーモアと創造性を交えて発表した。メキシコは今回の事業で公式プログラムを実施する唯一の寄港地であることから、自国についての情報をどのように他の参加青年たちに伝えるか熟慮を重ねた。麻薬戦争やそこから発展する暴力は、青少年に負の影響をもたらすメキシコの社会課題でもあるが、これらの情報も可能な限りオープンにするよう心がけた。

故郷メキシコに寄港すると、メキシコの同窓会組織が私たちを温かく歓迎し、参加青年たちは陽気で気さくな既参加青年たちの受入の様子に感銘を受けた。事業のニーズに応じて、このような多文化が交わる機会を企画することが、事後活動の一部であり、また日本政府に対するささやかな恩返しにもなり得るということを参加青年は実感することができた。市と州の政府関係者が全面的に協力する姿勢は、国同士の外交関係を良好にするこのような行事の重要性を改めて強調した。

メキシコと米国の国境の壁—ラテンアメリカ領への入口—を訪問した際は、すべての参加青年が複雑な思いと感情にとらわれた。世界中の様々な国境付近で日々起きている過酷な現実思いを馳せると同時に、その国境が、メキシコにとっては日常の一部であることを共有した。移民のバックグラウンドを持つメキシコの参加青年にとって壁が何を意味するか、また困難を笑顔や笑い声で乗り越える文化の表出として、希望と平和を願って国

境の壁をあえてカラフルな絵や文字で彩っていることなどを説明するには、一定の時間を要した。

移民問題は国際社会における共通課題であり、この課題に対して各個人が異なる認識を持っていることが分かった。国境の壁訪問による「試練」（ある意味で私たち全員が試された経験となった）の結果、参加青年の間で交わされる移民についての議論は深みを増し、それはやがてその他の社会課題の議論へと私たちを導いた。いずれの議論のテーマも、現状を変え、より良い未来を紡ぐ若いリーダーたちにとって、移民問題と同等に重要な課題だった。

航海の最中、外部的要因によりたくさんの予定変更を余儀なくされたが、それらはこのプログラムをよりユニークかつチャレンジに満ちたものへと変化させ、管理部と参加青年が、柔軟性と課題解決能力を問われるものとなった。結果としてそれは両者の間の密なコミュニケーションやお互いへのフィードバックへとつながり、プログラムにとってプラスに働く要因となった。

たくさんの人に見送られながら、私たちは船上生活に戻った。私たちの間でできる限りたくさんのことを共有し合うと心に決めたことで、船内での日々はそれまでに増して忙しいものとなった。

東京に帰港し、にっぽん丸を離れる頃には、すでにお互いさようならを言い、別れを惜しんでいたが、プログラムは次の行程を控えていた。例年と異なり、参加青年が後半離れ離れとなる今回のプログラムの編成について、当初は心配していたが、より親睦を深めた状態で東京都内視察の日を迎えることができるなど、良い側面もあった。

大分への地方プログラムも、メキシコの参加青年が日本に対する理解を十分に深めたうえで臨むことができたという意味で有益であった。ホームステイを受け入れてくれたホストファミリーに対しても、深い感謝の気持ちを持って接することができた。地方プログラムのあと、帰国し、数日間チーム内での振り返りを実施するメキシコの参加青年たちにとっては、今回のプログラムの編成は、精神衛生の面でストレスが少ないものとなった。

日本への愛情、世界との調和を大切にしつつ、これから自分が暮らす社会で活躍するであろう柔軟で有能な11名の若いリーダーたちとともに、メキシコの代表青年としてこの事業に参加できたことへの感謝は生涯、忘れることはないだろう。

ニュージーランド

ナショナル・リーダー

Ma Te huruhuru, Ka rere Te manu (羽を与えれば、やがて鳥は飛ぶことを覚える)

私たち「世界青年の船」事業のアオテアロア、ニュージーランド・デリゲーションの旅はSWYNZの同窓会組織が実施した選考試験から始まった。この効果的な選考試験では、多様な同窓会メンバーにより書類審査とビデオ面接が行われた。この選考過程の特徴はナショナル・リーダーが決定されたあとに、ナショナル・リーダー自身が中心となり、参加青年の選考に関わったことだ。

このように選考に関わったことで、デリゲーションに選ばれた青年と最初の面接から、プログラムが終了し、帰ってくるまで一緒に並んで歩める特権を与えてくれたように感じる。この期間、彼ら一人一人の成長を見ることができたことは私自身に喜びと誇りを与えてくれた。ニュージーランドの若者のおおらかさを代表するような個性豊かで多様な青年を選考できたのだと確信している。

「世界青年の船」事業は、青年がリーダーシップを身に付けたり文化交流を経験したりする機会を与えてくれる唯一無二の非常に価値があるプログラムである。そこには未知の要因があり、それがとりとめのない空間を作り出す。このとりとめのない空間はまるで理想的な国際社会のように青年が新しいものに挑戦したり、新しいアイデアにより試されたりする場である。

今年はとても意義深い時間を海の上で過ごしたことで船上でのプログラムに特に意味があったと思う。参加青年がワークショップを実施したり、ディスカッションをファシリテートしたり、自分が持っているスキルを周りに教えたり、クラブ活動を主催したりするなど十分な機会を与えてくれた。私たち、ニュージーランド・デリゲーションにとって、カパハカ・クラブがとても人気なことで、参加した青年の真剣に取り組む姿勢は嬉しい驚きをもたらした。そのクラブ活動を主催したニュージーランドのリーダーたちは、クラブ活動を通してリーダーとしての力を成長させ、マオリの文化が国際的な場面で共有されることのインパクトを知ることができた。

ニュージーランド・デリゲーションとしてもう一つ印象深い出来事として、ナショナル・プレゼンテーションで自分たちの文化を発表したことが挙げられる。この時間は私たちにとって特別な時間となり、より深くそして長く続く絆がデリゲーション内にできた。発表が終わった後に多くの参加青年が私たちの文化に深く影響を受け

たと教えてくれたことはとても印象的だった。あともう少し、せめて15分でもこのプレゼンテーションを長くすることができたら、より大きな効果を発揮できただろう。

私たちはデリゲーション・ナイトでも自分たちの文化を共有することができた。音楽を流し、ワイアタ（歌）を歌い、参加青年と食べ物や飲み物を分け合うことはとても楽しかった。ニュージーランドのワインは特に人気だったので、もっと持って来られたらよかったと思った。

メキシコでの寄港地活動は私たちのデリゲーションに大きな影響を与えた。メキシコ料理に挑戦し、メキシコの人たちに出会い、バハ・カリフォルニア州への学びを深め、世界中から訪れた既参加青年との出会いをととても楽しんだ。

それと同時に、私たちは寄港地活動が抱える問題にも直面した。国境を訪れた際に十分に説明がなかったことや、地元の文化や人と触れ合うための時間の柔軟性や自由時間が十分に確保されていなかったこと、全体的にスケジュールに余裕がなかったことなどが挙げられる。すでに言われている課題点かもしれないが、未来の寄港地活動にいかされることを願う。

私たちのデリゲーションはプログラムの全ての瞬間を精一杯過ごした。青年たちにとっての印象深い思い出は、公式プログラムでの出来事だったり、飲食を共にした際や廊下などで夜遅くまで語り合ったことなど様々だ。価値のある会話が行われたり果てしなく深い絆が構築されたりするのはこのような時間なのである。将来のプログラムではこのような交流を受け入れ、促進していくことを願う。

この文章の冒頭で述べた、ウァカタウキ（マオリ語の格言）は「世界青年の船」事業が参加青年に与える限らない影響への感謝の言葉だ。私はこの温かい気持ちで満たされた心でこのプログラムを実施してくれた内閣府及び管理部門へ感謝を述べたい。みなさんの働きと寛大さは冒頭の格言通り、青年たちをリーダーシップ、信頼、自信、それ以外にももっと多くの意味を持つ羽で飾り、彼らが選んだフィールドで高く羽ばたける力を与えてくれた。

SWYという魔法を作り上げるために行われた全てのこと感謝する。

Arohanui (愛と感謝を込めて)

「世界青年の船」事業は、私たち一人一人が、より良い自分に変化することができる、ユニークで忘れることができない、人生を変えるような体験だった。この事業を通じて、私たちは自身のことをより深く理解し、他の文化に対して共感し、受け入れられるようになったと確信している。私たちが過ごした45日間は、自己発見と自己成長、そして他者との触れ合いを通した多くの発見に満ちていた。

この事業は、私たちのアイデンティティや価値観、歴史、文化などを世界に共有すると同時に、それらを世界から学ぶことができる、多元的な空間だった。自由に議論できる空間を創り出してくれたという意味において、次の要素に特に感謝している：

- 誰もが友情を築くことに積極的であり、それがあきたりな解釈を超えて、お互いに対して深い理解することにつながった
- 誰もがお互いの違いを認識し、その多様性から学ぶ意欲があったため、自分がどのように見られるかを恐れることなく、一人一人がありのままにいられた

偏見や先入観、差別からは無縁の、常に思いやりとお互いへの理解に満ち溢れた空間を創り出してくれたこの事業は、たとえ私たちの間に違いや物理的な距離があろうとも、一生続く真の友情を築くことができるということを教えてくれた。思想や身体的特徴の違いがあったとしても、私たちは似たような不安、希望、価値観を持ち、究極的には同じ心と感情を持つ人間である。

また、世界各国から集まる参加青年たちに、ペルーの文化を披露できたことはすばらしい機会だった。私たちが提供した食べ物、飲み物、ダンスなどを各国の青年たちに楽しんでもらえたことで、私たちは自国を誇りに思うことができた。さらに、こうした文化紹介を通じて、物理的に遠く離れた国に暮らしているはずなのに、伝統や世界観、先祖代々の知恵などに類似している点があっ

たことに感銘を受けた。

国際問題をより身近なもの、自分ごととして扱うことにより、課題に対して共感を伴って議論することができ、またそれぞれの地域で、課題解決のために行動を起こしている事例に刺激を受けた。参加国間の多様性、また若いリーダーたちの多様性は、それぞれが直面している異なる現実をオープンに議論する最適な環境だった。お互いが尊敬し、尊重し合える間柄で国際問題を話し合えることは、心を開いて相手の話に耳を傾けることができる環境を築いた。

親しい人たちと一時的に離ればなれになり、その人たちとのコミュニケーションも非常に限られる環境にありながら、一方で私たちは新たな友情を育み、今回の旅を共にした“SWY32ファミリー”を形成した。

さらに、仲間内で学び合い、教え合う“peer learning”の活動は、一定の頻度でリーダーシップを発揮する非常に良いトレーニングとなり、スキルと自信の向上につながった。この経験は、自国に戻った際に、より効果や影響が大きい社会貢献活動に取り組む後押しとなるだろう。さらに、みんなが「Keep SWYing（これからもSWYを続けていこう）」という感覚を共有できたことで、私たち一人一人が将来を担うリーダーであるという自覚を持てた。

日本と客船につぼん丸は、これらのすばらしい体験にふさわしいすばらしいシナリオを提供してくれた。このシナリオの中で、私たちは日本文化やおもてなしの心、人々や美しい風景について学ぶことができた。このような事業を主催してくれる内閣府に心から感謝している。この事業が人々に良い刺激を与え、国と国、文化と文化の懸け橋となり、今回の事業で輩出した新たなグローバル・リーダーたちがよりよい世界への希望を感じることができたことを確信している。Let's keep SWYing!!!

スリランカは、光栄なことに今年度の「世界青年の船」事業の参加国のみならず、来年度の寄港国に選ばれた。

最初に、活動分野の多様性を重視し、慎重に12名の代表青年を選出する選考過程に始まり、そこで選ばれた青年たちが事業に必要なスキルと知識を習得するために尽力してくれたスリランカの国立青少年評議会、世界青年の船事後活動組織、そして在スリランカ日本大使館に感謝を伝えたい。これらの支援は、「インド洋の真珠」

と称される小さな国、スリランカから、故郷を離れてこの事業に参加するための適性をチームに与えてくれた。

日本への渡航直前に、参加が決まっていた4名の仲間に別れを告げ、たった8名の、それも1名を除いて残りすべての青年が女性という極めてバランスの悪い編成でこれから先の困難に臨まなければならない不安を抱えつつ、私たちの旅は始まった。

この事業に参加しなければ、おそらく生涯をかけても

叶わないような、多くの学びと強い友情を得ることができた。他国の青年たちとの密度の濃い会話や、地球的規模の課題に対する多角的な視点と新たな知識、そして異文化に対する理解を深めてくれた。それはさながら、箱の中のねずみのように、外界からのいかなる妨害からも遮断された世界だった。スリランカ青年にとって、自国が寄港地ではない回に「世界青年の船」事業に参加することは極めて稀であり、そういう意味では今回のメキシコへの寄港は私たちにとって事業の大きな楽しみの一つであった。島国に暮らす私たちにとって、寄港地活動においてメキシコと米国の国境の壁を訪問できたことは、本事業の中で一番印象に残っている。この体験から、国際社会における多文化・多民族の共生の重要性について

改めて考えさせられた。

地方プログラムで訪れた山形はとても美しく、またドラマ「おしん」に慣れ親しんでいる私たちにとって、日本の中でも最も知名度が高く、また訪問したい場所の一つでもあった。楽しいだけでなく、学びの多い訪問となった山形訪問において、現地青年たちとの交流と私たちの学習の機会を最大化し、効率的な行程を企画・運営してくれた山形県 IYEO（山形県青年国際交流機構）の存在はとても大きかった。滞在中、私たちは自分の家で、自分の家族と過ごしているように感じる事ができた。そんな心安らぐ時間を提供してくれたホストファミリーと現地スタッフのホスピタリティに、心から感謝している。

船長からのメッセージ

につぼん丸船長 仙田晶一

こんにちは、令和元度「世界青年の船」事業でにつぼん丸船長を務めました仙田晶一です。今回は、バーレーン王国、ブラジル連邦共和国、エジプト・アラブ共和国、フランス共和国、英国、ケニア共和国、メキシコ合衆国、ニュージーランド、ペルー共和国、スリランカ民主社会主義共和国、日本の青年たちを乗せ、太平洋を東西に横断する航海でした。航海は下記の4つに分けられます。

1. 横浜～ホノルル
2. ホノルル～エンセナーダ
3. エンセナーダ～ホノルル
4. ホノルル～東京

上記について、小職のメモを基にした航海の概要を以下に記します。

1. 横浜～ホノルル

1月16日、「行ってらっしゃ～い。」の多くのお見送りを受けて横浜港大棧橋を出港。犬吠埼沖より針路を東に向けると同時に波高は1.5mとなり横揺れが始まった。

1月19日、波高3m以上の中、ナショナル・プレゼンテーション（日本、バーレーン、フランス、英国）があった。

1月20日、ナショナル・プレゼンテーション（ニュージーランド、エジプト、ケニア、ブラジル）二日目。

1月21日、今日も太陽燦爛、気温20度、ナショナル・プレゼンテーション（ペルー、スリランカ、メキシコ）は最終日。

1月21日、前日の夜中に日付変更線をこえたため、Repeated Dayである。

1月22～23日、晴天、ホノルルに近づいた。夕方には綺麗なサンセットも見られ、船尾では参加青年たちの歓声が上がった。

1月24日、ホノルル到着、参加青年たちは半日であるが、元気に上陸し、晴天のホノルルを楽しんだと思う。皆の顔が輝いていた。

2. ホノルル～エンセナーダ

1月25～27日、曇りの日が続き、気温も20度を切り、肌寒くなってきた。

航海中に気温が16度と下がるものの、太陽が綺麗に水平線から上がり、気持ちいい日もあった。デッキでは参加青年たちがクラブ活動として、ブラジルのカポイエラ、ヨガを楽しんでいた。

横揺れが大きくなる日もあったが、参加青年たちは強くなったのか、元気な笑顔を見せてくれている。若者は対応力が高いのだなど実感。

1月30日、エンセナーダ入港、午前中は岸壁で歓迎式、夕方はメキシコ日本大使、エンセナーダ市の幹部を迎えての船内パーティー、日本の参加青年たちの日本太鼓、着物着用の日本舞踊で大盛り上がりであった。

2月1日、エンセナーダ出港。岸壁では多くの青年たちが歌い踊り手厚いお見送り。離岸後のにつぼん丸の長三声の汽笛でお見送りのお返し。

3. エンセナーダ～ホノルル

2月2～3日、エンセナーダ出港後、いきなり波風を右舷正横から受けて、横揺れ、縦揺れが大きくなり、飛沫

が上がる。参加青年の船酔いが多くいるとの情報もあるが、ホノルル入港に向けて、針路、速力を変更することができず。がんばれ参加青年と祈るばかり。

2月4～5日、波風が船尾方向へ変わり、船体動揺が小さくなり、気温も20度以上と上がり、気持ちいい日が続く。

2月7日、晴天、気温25度、ホノルル入港。この日はきれいな夕陽を見ながらホノルルを出港。

4. ホノルル～東京

参加青年との会話の中で一番うれしかったのは航海士を目指している日本の参加青年がいたことだ。がんばれ後輩！また、一番困ったのは「揺れを止めて！」のお願い。

2月8日の夜はきれいな満月が輝いていた。

2月10日、晴天、風波小さく、船体動揺も小さい。参加青年たちは次席三等航海士の説明で星座教室を堪能。

2月12～13日、日付変更線通過し、2月11日はスキップ。波風を船首から受け、縦揺れ、横揺れ。この航海で

一番の船体動揺であったと思う。

2月16日、東京入港1日前、低気圧接近中で波風が強くなるとの情報。夕方、波風が強くなり、縦揺れ、横揺れ、パンチングで飛沫が上がるが目的地の東京湾に向けひた走る。強くなった参加青年たち、もうひと踏ん張り祈るばかり。

2月18日、約1日遅れとなったが、午前6時50分頃、東京へ着岸した。

今回の航海は大きな時化に苦しみ、また荒天により予定よりも帰港が遅れたこと、心苦しい限りです。

最後に、無事に航海を終えたことにつきまして、古矢管理官をはじめ管理部及びスタッフ、陸上でご支援を頂いた方々も含めまして本事業の関係者皆様に御礼を申し上げます。ありがとうございました。